

# 小説半導体戦争（一）

## 1 一時帰国

1

日比谷通りはひどい渋滞だ。木原シオリは腕時計に目をやった。午後の八時を回っている。まだ十二月の声を聞いたばかりだというのに、日比谷の森は冬の気配を漂わせている。

木原シオリは約束の時間に遅れたことに焦りながらタタシーを降りると、急ぎ足で帝国ホテルの回転ドアを通り抜け、エレベータホールに向かった。

エレベータには客の姿はなかった。シオリは十一階で降りた。スイートの一室から甲高い笑声が漏れてきた。パーティは盛り上がっているようだ。懐かしい声が混じっている。シオリはすこしためらいながらドアを押し開けた。

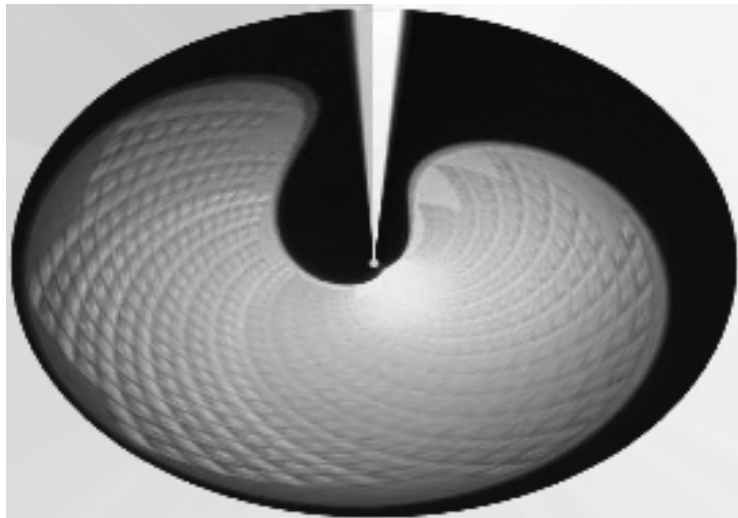
「遅かったじゃない、シオリ……」

とんがったいい方で、久保理恵が歩み寄ってきた。目元にいたずらっぽい笑いが浮かんでいる。少し酔っているように見えた。学生の頃から伸ばしていた長い髪を、左肩にゆるやかに束ねている。軀からだは小柄だが、理知的で、少し皮肉屋のところは昔とちつとも変わっていない。でも、痩せたかな……理恵の顔を見ながらシオリはそう思った。

「ごめんなさい。管内の会議が長引いてしまって、こんな時間になっちゃった。私にもウイスキーをちょうだい」

シオリは甘えるように言った。

学生時代の友だちの懐かしい顔が、いつせいにシオリを見ながら笑っている。



杉田望

理恵はシオリの肩を抱き、ソファに座らせた。

「まさかあなたがニューヨークからわざわざ来てくれるとは思ってもみなかった。本当に嬉しい」

理恵は少し大袈裟ないい方をした。表情がきらきらとして美しい。気どりがまるでなく、自分が美人の部類に属していることなど、少しも気付かないという顔でくつたなく笑いこぼるのには、大学の寮生活をしていた頃と同じである。シオリはそんな理恵の顔を見て、なんだか安心するのだった。

しかし注意深くみると、理恵の表情には、女性キャリアとしての風格が滲み出ている。学生時代の理恵といえば、決してガリ勉タイプの学生ではなかったが、好奇心だけは人一倍旺盛で、ゼミの活動など自分の好きなことには、寝食を忘れて熱中するような学生だった。

シオリは国家公務員の上級試験にパスしたが、理恵は大学を卒業するまぎわに、ゼミの教授の推薦で東洋経済研究所という政府県金融機関が設立したシンクタンクに入所することが決まった。今年でちょうど十年目にあたる。仕事にも脂が乗り、充実した研究生活を送っているようだ。

「実をいうと、私もこうしてみんなと会えるとは思っていなかった。あなたたち少しも変わっていないみたい」

シオリは通産省の官房秘書課の筆頭補佐からニューヨーク・ジエトロに転出し、二年前から産業調査員を務めている。キャリア官僚とはいっても女性が産業調査員になるのは、もちろん通産省としてもシオリがはじめてのケースだった。こうしてみんなの顔を見るのはニューヨークへ転出する際に開いた送別会以来のことだ。

五人の女性たちはそれぞれ仕事を抱え忙しいせいもあって、集まる機会はめっきり少なくなっている。男の品定めをしたり、グルメに凝ったり、たわいない世間話で時間を過ごす仲間としては、それぞれがあまりにも忙し過ぎた。

「今日のためにわざわざニューヨークから飛んできたというわけ？」

「まあね……」

「本当かしら……？」

「正直いうと、本省との打ち合わせがあったので、一時帰国中ということなの」

「ついでというわけか。まあ、いいでしょう。こうして来てくれたんだから……」

相変わらずはりきっているみたいね。そんなに仕事が面白いのかしら」

ウイスキー・グラスをシオリにさしだしながら、そういつたのは久美子だった。紺地に蘭を染め抜いた派手な和服がとてよく似合う。項うなじのほつれ毛が、熟れた人妻の香りを感じさせる。久美子は結婚して七年余りがたっていた。二人口の子供が生まれたと、昨年の暮れに届いたクリスマスカードに書いてあった。

「赤ちゃんはどうしたの……？」

シオリはさりげなく聞いた。

「ぶつぶついつていたけど、亭主に預けてきちゃった。こんな機会、一年にいったんもないことだから、思いつき羽をのばさなくっちゃね」

「そうです」

理恵が同調するような口調でいった。

パーティとはいつても、テーブルの上に簡単なオードブルと水割セットが用意されているだけだ。一流ホテルのスイートといえば豪華だが、中身は質素である。いかにも理恵らしいやり方だ。淡い紫色をした洋蘭が壁ぎわの花瓶に生けてあった。たぶん、理恵の交渉でホテルにサービスさせたのだろう。

「どうなの……忙しいの？」

久美子がシオリに聞いた。

「そりゃあ、馬鹿みたいに……できることなら旦那の稼ぎで、のうのと暮らしてみたい、久美子みたいにな」

「それ皮肉のつもり？」

「そうよ……そのつもりでいったのだけど、あなたにはそうは聞こえなかった」  
お互いに遠慮なく、なんの利害もこだわりも持たずに自由な会話を楽しめるのは、女性たちだけに許された特権のようだ。こうした機会が減多にないたためか、久美子は顔を上気させながら喋っている。

足を組み、ソファにゆったりと腰を下ろしているのは、裕美だった。裕美は大学を卒業すると、新聞社に入り、女性記者としての道を歩んでいた。さきほどから仲間たちのやりとりをやや醒めた態度で聞き入っている。昔からそうだったが、裕美は人間関係に対して淡泊というのか、ある距離をおいて接するようなどころがある。物事に対する醒めた目は、ジャーナリストになったことで、一層鋭く研とぎ澄まされたようだ。

「美沙子がいよいよだけど、彼女、少しは元気になったのかしら？」

シオリは部屋の中を見渡すようにしていった。

理恵がくれた案内状には、美沙子を励ます意味を含めて仲間うちで東京でちょっとしたパーティを開きたいのだが、都合がつかず出席しないか、とあった。なにしろ、シオリはニューヨークにジェット口産業調査員として駐在している身である。とても出席できそうにないと、丁重に断わりの手紙を出しておいた。

東京へ出張する話が突然待ち上がったのは、その直後のことだった。

通商問題をめぐって、日米関係が再び険悪化、その対応策を本省で協議するため、東京に出張することになったのだ。シオリに与えられた出張の時間はかっきり一週間だ。名古屋にいる両親の顔さえも見られそうにないのだから、果してみんなに会えるかどうか、少し不安があった。

帰国してからは連日のように会議が続いていた。そのあいまをみては、米国の経済情勢に関する局長レクチャーであるとか、起案書の作成であるとか、シオリにはいつときも気を抜くゆとりもなかった。

今日にしても、午前中から続いていた会議が終わったのは、七時半を回っていた。それでいて、本省での会議は時間をくった割には、結局、何も決められず終わった。

シオリはそのことに腹だちを覚えていた。しかしこうして昔の仲間に出会っていると、さっきの不愉快な会議のことも忘れてしまっそうである。

「彼女……今日は出席できないの。みんなによるしくと伝言があったわ。まだ、神戸の実家の方にいるようだけど、シヨックから立ち直っていないみたい」

「そう……御主人が亡くなって、もう三カ月たっているのね。あの歳で後家さんじゃ確かにかわいそう……それも自殺なんですから、御主人は？」

シオリはさりげなくそう聞いた。  
「そうみたい」

久美子が答えた。陽気な笑声がとだえ、一瞬、部屋のなかには重苦しい空気が流れた。本当に人の運命などというものはわからない。美沙子はいわゆる上流階級に属する家庭に育ったお嬢さんだった。大学を卒業するとそのまま親の薦めに従って、大蔵省の役人と結婚した。結婚式にはここにいる女ともだちが全員出席した。その時の美沙子はとても幸せそうに見えた。つい昨日のこのようにシオリには思い出される。誰もが羨む人生を歩んでいるように見えた美沙子を襲った

突然の不幸。

「ものは考え方ひとつよ。再婚する気ならば、世の中には男ならいくらでもいるじゃないの。いつまでもめそめそしてしないで、働きにでも出たら気分もすっきりすると思うけどね」

それまで黙ってみんなの話を聞いていた裕美が横から割りこむようにしていった。同情のない裕美のいい方に、久美子が少しばかり腹をたてた。

「そうかしら……あなたにはまったく人の心というものがわからないよね。あなたの場合、不幸にして心底男に惚れるということもなかったよっだし、これはいつでも無駄なようね」

もちろん本気ではないが、久美子と裕美とのあいだで、ちょっとした口論が始まった。仲が良いのか、悪いのか。二人が会えばいつも些細なことで言い争うことになる。理恵はたきつけるようにして、二人のやりとりにちゃちゃを入れていく。

その時、ナイト・テーブルの上の電話が鳴った。

「あなたによ」

理恵が受話器を取り上げると、シオリの方を見ながらいった。シオリは困惑した顔で受話器を受け取った。声をひそめて、返事をしている。表情が硬くなっていた。

「ごめんなさい……せつかくのパーティなのに役所に戻らなければならなくなっちゃった。まったく因果な商売なこと。いつもこれなんだからね、同情してくれる」

「少しも……国家を背負っている人間なんだからしかたないじゃないの。まあ、せいぜい役人には日本国のために頑張ってもらわなくちゃね……高い税金を払っている意味がない」

憎まれ口をきいたのは裕美だった。

「いつまで、東京にいるの？ これでお別れっていうこと……ね」  
寂しげな顔をして久美子がいった。

「そう……明日の午前中には東京を発つことになると思う。ニューヨークの任期はあと一年余りだから、みんなとはそれまで会えないかも知れない。くれぐれも美沙子にはよろしく伝えておいて」

シオリはそう言い残すと、挨拶もそうそうに水玉模様の薄地のコートを手にし、部屋を出た。

外は冷えていた。シオリの耳元を冷たい夜の風が突き抜けていく。車を拾うよりも、歩いた方が早い。シオリは日比谷公園を通り抜けて、まっすぐに通産省の方角を目指した。シオリの頭のなかは、すでに仕事のこと一杯になっていた。

2

「緊急事態が発生した」

電話の向こうで、官房総務課の三本総轄班長がいった。

大臣官房や通商政策局、貿易局、機械情報産業局など、主要関係部局の幹部に召集をかけているらしい。こんな時間に召集をかけるとは、いったい何事が起こったのか。考えてみれば、日米関係には何か起こってもおかしくはない、そんな状態にある。ニューヨークにシオリが産業調査員として勤務してから、日米間には次々に厄介な問題が起こった。八六年の第一次協定についてついこの間、九二年から実施される第二次S D I（宇宙防衛計画）プロジェクトの資金負担をめぐる交渉が終ったばかりである。

財政事情が好転しないときに、日本政府が四十億ドルもの巨額な資金負担をすることになったのは、いかにも辛い話である。その上に米政府は、安全保障上の理由から研究開発成果を日本側に公開することを拒否した。資金分担問題はともかくとして、研究成果を入手できないのでは、なんのための共同研究プロジェクトであるのか。結局、交渉は「民生部門の活性化に役立つ技術に限って、関係協力国に情報を公開する」という、奇妙な妥協を図ることで決着した。シオリは日米交渉のなかで、いやというほど、日本の非力を思い知らされている。

問題はこの秘密協定の中身を国内にどう説明するかだ。こんな協定を米国と結んだことを知れば、野党どころか、自民党までが協定批准でそっぽを向く可能性があった。

実をいうと、今回の東京出張は協定の中身を国内向けにどのように説明し、国内の関連法といかに整合性を持たせるかを、協議することにあつた。議論はまともならず空転を続けるのも、問題の性格を考えれば、しかたのないことなのかも知

れない。どうしようもなく不毛な議論が続けられていることに、シオリは深い疲れを覚えていた。

日比谷公園には人影は少なかった。浮浪者の群れが焚火で暖を取っているそばを駆け足で通り抜け、シオリはゆとりのない気持ちで本省ビルの前にたどり着いた。

節電のために、エレベータは一基しか動いていない。シオリは苛立ちながらエレベータが降りてくるのを待った。今日は土曜日ということもあって、深夜の営内は不気味に静まり返っている。

ドアを開けると、会議室は煙草の煙でかすんでいた。顔見知りの男たちが定められた席に妙な顔で座っている。重苦しい空気に包まれている。驚いたことに官房長の田所幸助の顔が見えた。こんな深夜の会議に官房長自身が出席しているとは、珍しいことだ。

会議を取り仕切るのは機械情報産業局の加藤民雄次長のようだ。円形テーブルの中央に官房長と並ぶ格好で座っていた。加藤次長は全員が席に揃ったのを見計らうと、ひときわ大きな咳払いをして、会議が始まったことを宜した。機械情報産業局総務課の渡辺筆頭課長補佐が、出席者に用意したペーパーを配っていた。配られた資料を田所官房長が所在なげにばらばらとめくっている。疲れた表情をしていた。シオリは軽く会釈して、末席にそつと腰を下ろした。

通産省本省ビルの最上階にある会議室から美しい東京の夜景を楽しむことができる。霞が関ビルにはまだこうこうと明りがついていた。シオリはぼんやりと東京の夜景に見入っていた。誰もが不機嫌な顔で、押し黙って座っている。

「よろしいですかあ……それでは、米州太平洋課の牧口課長から報告をうかがいたい」

そういい終えると、加藤次長が鋭い視線を米州太平洋課長の席に向けた。

牧口課長が太った軀を大儀そうにむっくりと起こし、用意されたペーパーを手にして、話を始めた。糖尿病を患っていると聞いていたが、額にはうっすらと脂汗が滲んでいた。どうみても不健康な太りかたをしている。

「駐米大使館の商務参事官からの報告によりますと、本日の午前九時、米国の半導体メーカーとしては売上で第三位のモトラム社が、カリフォルニア州連邦区裁

判所に対し、会社更生法に基づき破産措置を取るように事務手続きを終えたようであります。そこでわが国との関連であります。モトラム社は破産に至ったのは日本企業による不当なカルテル行為に原因があった、と訴えているようであります。事実関係につきましては現在、ワシントンと緊密な連絡を保ちながら調査を続行中であります」

貿易局長の梅田祥一は、米国の半導体メーカーが倒産したぐらいで、こんな深夜にわざわざ省議を開くこともあるまいに…  
：そういう表情を浮かべてぶぜんとして  
いる。

牧口課長は額に滲む脂汗をハンケチで拭き取りながら、言葉が続けた。第二次S  
DIPプロジェクト交渉では、交渉当事者のひとりであっただけに、ひどく疲労しているようだ。出席している全員が牧口課長の



話をほとんど無感動に聞いていた。正直いって、通産省はこの種の話に疲れているのだ。

「ここで留意しておかなければならないことは、倒産の原因と申しますか、モトラム社の主張によりますと、日本企業の価格カルテル行為が正常な商活動を阻害し、ついに倒産に追い込まれた、ということでもあります。それから第二に、モトラム社に続きまして米国半導体メーカーの幾つかが、倒産に追い込まれるのではないか、そのような懸念が起きていることでもあります。現在までに、そうした噂にのぼっている米国半導体企業は、レオセン社、ハリウス社など数社が数えられ、連鎖反応が起きているのではないかと危惧されております。問題は対日関係へのリアクションであります。仮にカルテル行為が存在するとすれば、日本企業は厳しい批判にさらされかねない、その点が心配されます」

そこで牧口課長は大きく息をつき、いったん言葉を休めた。

米国の半導体不況が極めて深刻な状態にあることは、よく知られた事実だった。八七年にも日本が輸出協定を破ったとして、米国は強烈な制裁措置をとったことがある。シオリはそのときのことを思いだすだけで、重い気分になってしまつた。



それにしてもまた、あの堅実経営で知られるモトラム社が倒産に追いこまれたとは……厄介な問題が起こった。だが、シオリにはどうも実感が伴わない。他人事のように思えてならなかった。明日はニューヨークか、そんなことを漠然と考えながらシオリは窓の外をぼんやりと見ていた。

貿易局の大橋祐三輸出課長が質問に立った。

「牧口課長はモトラム社倒産の原因を日本企業による価格カルテルにあるようだと言明されたが、それは輸出製品に關してのカルテルということなのか。仮にそういうことであるとすれば、米政府との輸出価格協定の取扱が問題となる。しかし、この協定に關しては、連邦取引委員会からエビデンスを入手していることもあるので、問題はないのではないか。心配されるのは、マスコミがミスリードすることで、このあたりの事情を充分に広報しておく必要があるのではないか、私にはそのように思える」

まだ、事態を正確に把握できていないためか、大橋輸出課長の発言に対しては、誰も意見らしいことをいわなかった。しかし、シオリは大橋輸出課長の話を聞きながら、それはいかにも樂觀的に過ぎる考えだ、と思った。

考えが甘いというのは、まず第一にモトラム社が米国が対ソ軍事戦略として懸命に進める第二次S D Iプロジェクトの中核企業である、ということである。そのモトラム社が日本企業のカルテル行為のせいで倒産に追いこまれた、というのだ。状況がそう認識されている以上、アメリカ人の性格からすれば、感情的な議論が飛び出してくることは、充分に予想される。

なにかとぎくしゃくし、緊張を強めている日米関係。加えていえば、民主党のアイコックが大統領に就任して以降、独禁法の運用がことのほか、厳しくなっている。しかも、アメリカ社会は弱者を力でねじ伏せるこの種のカルテル行為に対して、ことのほか厳しい道徳観が確立している。最も破廉恥で、アンフェアな行為だと、米国社会では激しく糾弾される。とくにカルテル行為に対しては、異常なほどの反応を示す国民だ。

そのことは、わずか二年余りの米国生活だったが、家電製品の対米輸出問題をめぐる交渉などで、シオリには充分過ぎるほど、経験したことである。事実関係は別にして、倒産したモトラム社は倒産の直接の原因を「日本企業に排他的なカルテル行為」があったと、主張しているのだ。どう考えても、この問題は厄介な

ことになりそうだ。

「輸出価格に関して、これをカルテル行為だといっているのであれば、これは反論の余地はある。もし仮に、モトラム社がそのような主張を申し立てているのだとすれば、それは事実誤認に基づく主張であって、日本側としてはとりたてて問題にすべきことではないように思えるが、どうだろうか」

同じ意味のことをくりかえしていったのは梅田貿易局長だった。論旨としては大橋輸出課長が発言したこと、ほとんど同じ内容だ。梅田局長がいうように日米間には、半導体の貿易摩擦を回避するために、数量と価格を規制する協定が成立している。そのことを取り上げて、カルテル行為だと糾弾するのであれば、梅田局長がいうように、日本としては反論する余地は残される。しかしモトラム社ともあるうものが、そのことに無知でこんな訴えを起こすはずはない。

牧口課長が立ち上がり、加藤機械情報産業局次長の方に向かって発言を求めた。「ご指摘の件に関しては、まだ詳細な情報を手していないので、断定的なことをここで申し上げることはできません。ただ、モトラム社が申し立てている内容から判断しますに、彼らが問題としているのは輸出用の半導体のことではなく、米国に進出している日本企業が現地で生産している製品に関してカルテル行為の疑いがある、そう主張しているのではないか。私にはそのように思われる」

妥当な考え方だと、シオリには思えた。八十年代の後半から激化した半導体の対米輸出をめぐる日米摩擦を回避するため、日本は米国との間に包括的な半導体貿易協定を締結する一方で、半導体メーカーの多くは米国に工場を建設して、輸出代替用の製品を現地で生産していた。通産省としても確かなデータは持っていなかったが、日本企業の生産高のうち約四十パーセント近くを米国で生産するようになっていた。海外生産のうち、米国での生産比率が急速に高まっていたのである。

モトラム社が問題にしているのは、日本から輸出している半導体ではなく、牧口課長がいうように現地で生産している半導体が問題となっていると判断すべきである、シオリにはそう思える。官房長の田所幸助は眠ったような表情で、議論に聞き入っていた。その時、会議室のドアがわずかに開いた。眉をひそめるようにして、機械情報産業局総務課の渡辺筆頭課長補佐が立ち上がった。まだ、三半ばだというのに、白髪が目立つ。蛍光灯に照らし出された細面の顔が神経質

に歪ゆがんでいた。渡辺補佐はドアの外に立つ人と小声でやりとりしている。

「何事かね」

機械情報産業局次長の加藤民雄がとがめるような口調で、渡辺補佐の背中に声をかけた。会議が中断されたことに、加藤は少しばかり腹をたてているようだ。いや、加藤次長だけでなく、この会議室に集まっている誰もが苛いら立っていた。

「はあ……」

駐米大使館からの続報のようだ。軀からだをかかめるようにして、渡辺が加藤次長の耳元で、一言二言ささやいた。加藤次長に促すすまれ、渡辺補佐が手にした公電を読み上げた。

「第一、モトラム社がカリフォルニア州連邦区裁判所に提出した会社更生法に基づく会社破産救済申請は、同日午後、同裁判所が正式に受理しました。第二、モトラム社は今回同社が破産に追い込まれた直接の原因が日本企業によるカルテル行為にあるとの認識に立ち、東洋電気、東京通信機、日浦、三唱電気、日興製作所など関係五社を対象にして、反トラスト法に基づき私的訴訟に持ち込むため、控訴を準備中と報告してきています。問題はやはり、これら関係五社が米国内で、カルテル行為を行っていた事実があるかどうか、その事実確認にあると、現地大使館は判断している。第三に事実関係の確認を行うため、引続き現地サイドで調査を継続するが、本省においても事実関係の掌握のため、関係企業からの事情聴取をお願いしたいと、商務参事官名で請訓せいくんしてきております」

公電は駐米大使館で商務参事官を務める川越勝久が起草したに違いない。川越はシオリの一年先輩にあたり、仕事の関係でワシントンとニューヨークの間で、しょっちゅう連絡があった。川越は生真面目を絵に書いたような男で、人間としてはちつともおもしろ味はないのだが、仕事はよくできる男だった。

「そうすると、三倍額賠償請求という性格の裁判になるのかなあ……これだと、えらい金額を請求される可能性があるわけだ」

目を閉じたままの姿勢で、官房長の田所幸助か、ぼそりといった。

三倍額賠償制度とは米国の反トラスト法の大きな特徴で、違法行為によって損害を被った「私人」または「法人」が、直接違法者を相手として、損害を受けた金額の三倍を請求できるという制度だ。裁判所がタコと判決した場合、カルテル行為者は被害者に対して、損害を受けた金額の三倍を支払わなければならない。

確かにこの制度は「被害者」が訴訟に踏み切る大きな魅力チャームになっている。カルテル行為の摘発に最も大きな威力を発揮するのが、実をいうと、三倍額賠償を保障したこの制度のためである……と、いわれるのもそのためだ。モトラム社が日本企業による反トラスト行為を問題にしているのであれば、田所官房長がいうように、三倍額賠償請求に狙いがあると見なければならぬ。

いったい、どの位の金額になるのか……ンオリは頭のなかで計算してみたが、とてつもなく巨きな金額になることだけは間違いなさそうだ。

「大統領府や議会関係者の動きはどうだろうか。今回のモトラム社の倒産に関連して、なにか変わった動きか、発言でもあるんじゃないか」と、田所官房長が言葉をつないだ。

大統領府や議会が動き出すこと、それは十分に予想されることだ。とりわけ米政府が神経を尖らせているのは、第二次SDIプロジェクトとの関係である。モトラム社はペンタゴンの委託を受けて、第二次SDIプロジェクトの関連計画として、32メガビットの軍事用のカスタム次世代素子の開発に当たっていた。その中核企業が倒産したというのだ。

なんらかの報復は覚悟せねばなるまい。それは果てしない泥沼のような対米交渉が始まることを意味していた。

「はあ、公電では、そのことには特段、触れていませんが……」

緊張した表情で、会議用テーブルの端に座る渡辺筆頭課長補佐が答えた。

モトラム社が会社更生法の適用を求め、カリフォルニア州連邦区裁判所に事務手続きを行ったのが現地時間で午前九時。まだ半日と経っていない。だからホワイトハウスが対応策を決めるには、時間的にはまだ早過ぎるように思える。

だが問題の性格から考えると、またしても対日報復措置など厳しい態度で臨んでくるのではないか、そうした意味のことを大橋輸出課長が延々と述べ立てていた。自明のことをくどくど強調するのが、大橋輸出課長の癖である。聞きよければ、確かにいやみに聞こえる。そこで大橋輸出課長に反論したのが、技官で電子機器課長の中島友之だった。

「輸出課長は事態を少し大げさに考えているようだが、ただか一民間企業が倒産したぐらいのことで、果して大統領府が動くかどうか、私には疑問に思えるが

……」

中島が発言した内容はどうでもよいことのようにシオリには思えた。しかし、やはり中島課長の潜在意識のなかに、屈折した反米感情があることだけは確かなようだ。

日本は貿易や経済問題で、米国からこれでもか、これでもか、というほど痛めつけられてきた。中島課長はそのことを言外にいいたかったようだ。

中島の反論に対して大橋輸出課長が、今度の問題の性格をどのように捉えるか、対米認識が甘いと、むきになって反論を加沈だ。二人の間に面子を賭けた激しいやりとりが続いている。議論は次第に仮説に仮説を重ねた内容のない空虚なものになっていった。二人の無内容なやりとりに、さすがに梅田貿易局長は怒りだした。

「くだらん……やめたまえ！」

荒い言葉で二人の発言を制した。

両課長は驚いたような顔をし、黙りこくってしまった。小太りな中島電子機器課長の顔が興奮で痙攣していた。

部屋の中には白けた空気が流れた。ころあいを見計らうように、加藤次長がいった。

「いずれにしても、事実関係の掌握が先決である。引続きワシントンと連絡を緊密に取り合い、米国の動きを正確に掌握することがまず第一。第二に関係企業からの事情聴取を速やかに実施、反トラスト法違反の事実があつたかどうかを調査すること。ご苦勞を願うことになるが、以上、関係部局は速やかに作業を開始してもらいたい。それでは、これにて関係部局連絡会議を終えます」

加藤次長が田所官房長の方を見ながらそういった。田所幸助は深くうなずいてみせた。部屋の中にほっとした安堵の空気が流れた。

すでに深夜だった。たったこれだけのことを確認するのに、なんと五時間近くも要した。午前二時を回っている。シオリは深い疲れを覚えた。よろめくように席を立つ牧口米州太平洋課長の後ろ姿も痛々しかった。

ベッドのなかで、コーヒーをすすりながらシオリは、部屋に配られた新聞に目を

通していた。朝日がカーテンの隙間を通して、わずかに洩れている。コーヒーだけで、ぼんやりした頭を醒めさせようというのは、とても無理なようだ。BGMのポリリウムをいっばいにひねってみた。ムード音楽が流れてくるだけだった。吐き気をとまなう睡魔が襲ってくる。

シオリはほんの数時間しか寝ていない。管内の会議が終わりホテルについたのは、午前二時半を回っていた。こまごまとした事務処理を終えて、ベッドにもぐりこんだのが、午前三時半である。睡眠不足とひどい低血圧のため、ぼんやりして頭が霞んでいる。側頭葉のあたりが波打つように痛んだ。シオリはもう一度新聞に目を通した。

『モトラム社、半導体メーカーを反トラスト法違反で私的訴訟へ 懸念される反日感情の高まり』

経済面のトップで毒々しい見出しが躍っている。ワシントン発の特派員電の署名記事にはモトラム社は破産の事務手続きを裁判所に提出する一方で、日本企業関係五社を米国内で違法な半導体の価格カルテルを結び、このためモトラム社など米半導体メーカーは正常なビジネス活動を妨げられ、多大な損害を受けたとして、米国の他の半導体メーカーと協調して、反トラスト法に基づき私的訴訟に踏み切ることにした、とあった。

特派員の伝える記事は、少し大袈裟な表現ではあるが、駐米大使館の川越参事官が公電で伝えてきたこととほぼ同じ内容だった。記事には、幾人かの有識者のコメントがのせられている。米国内の有識者の反応は予想外に厳しい。ハーバード大学で教鞭をとるウエカーズ教授は特派員の質問に答え、

「カルテル行為とは、最も野蛮な商行為である。日本の企業は我々の祖先と我々が血と汗で築き上げたこの自由の国アメリカの秩序を無造作に破壊しようとしている。我々は自分たちの利益を守るために、彼らをこの自由な社会から永遠に追放すべき覚悟を決めなければならない。それが彼らにとっては最もよい教訓になるはずだ」

と、発言していた。

ウエカーズ教授は、親日派の重鎮として知られている。親日派と目されていた人々までが、厳しい反応を示していることに、シオリは驚きを覚えた。ひどく厄介なことになった。昨夜の関係部局連絡会議のことを思い出した。中島電子機器

課長の発言に見られるように、管内には米国に対する不信感が根強く残っている。要するに当事者の間にフラストレーションが高まっているのだ。今度の問題もそうだが、日米双方が感情レベルの議論を闘わせることになれば、どういうことになるか。

「なんとかしなければ……」

シオリはもう一度、新聞記事を注意深く読み返してみた。

モトラム社のスコット社長は急遽、記者会見を開いたらしく、新聞はその発言内容を囲み記事で大きく扱っていた。発言は相当に感情的だった。倒産の直接の原因、それは日本企業の違法なカルテル行為に敗北したことにある、と詳細なデータをあげながら幾度も強調していた。

おかしなことにスコット社長自身の経営責任については、いっさい触れていない。スコット社長は、倒産の原因をすべて日本企業のせいにしてしまうつもりようだ。どうみても日本が格好の攻撃目標になっている。それにモトラム社と共同歩調をとり、これも米国の有力な半導体メーカーであるハリウス社、レオセン社の両社も今度の私的訴訟に相乗りするらしい。両社とも経営不振にあえいでいることは、シオリも知っていた。この雲行きだと、他の半導体メーカーも私的訴訟に追隨する可能性がある。反日の大合唱が沸き上がってきそうだ。

米国の半導体市場が深刻な不況のさなかにあるとはいえ、モトラム社ともあるう有力な半導体メーカーがなぜ倒産に追いこまれたのか。シオリはベッドの上で新聞をほつり投げると、暫くそのことを考えた。確か創業は一九七二年だから、米国のベンチャー型の半導体メーカーとしては比較的古い歴史を持っている。八〇年代の後半までは順調に業績を拡大、売上高も米国の半導体メーカーとしてはパローズやインテルなどに続き、内外を含め百五十億ドルの巨額なシェアを確保していた。シオリはベッドから抜け出すと、昨夜、連結会議で配られた資料をブリーフケースから引出し、改めてモトラム社の業績を検討してみた。

モトラム社は半導体・通信機・情報システム・国防総省向けの宇宙開発関連及び軍需と四つの事業部門からなっている。半導体部門ではRAM（随時書きこみ読出しメモリー）やROM（読出し専用メモリー）やマイクロシステム、マイクロプロセッサ、さらにディスクリット半導体などを製造・販売、一方、通信部門では八〇年代の後半にかけて、自動軍用電話で急速な伸びを示したが、八九年に

入ると、需要は一段落したこともあって、オフィスや工場向けの通信機、通信システムの販売に傾注していた。だが、いずれも競争が激しい分野であるだけに、モトラム社の通信部門は低迷に喘いでいた。同社にとってはもうひとつの重点部門である情報システムも思うような事業の展開を図れず、苦闘を余儀なくされているようだ。売上高ではやはりペンタゴン向けのカスタム半導体と民生用の半導体が大きなシェアを占めている。

シオリは電子機器課が連結会議のために準備したペーパーをもう一度、丹念に読み返してみた。やはり八九年の決算が終ったあたりから、売上高、利益率ともに後退する傾向を示していた。原因は半導体の売上の減少にあるようだ。八八年で約八十億ドルの比率を示していた半導体の売上高は八九年の実績で見ると、六十五億ドルに大きく後退している。とくに米国内での売上の低下が目だっている。このことを指して、スコット社長は日本企業のカルテルに基づくダンピング行為と決めつけているのか。確かにモトラム社の半導体売上は急速に低下している。

もうひとつ注意深くみると、4メガビットRAMが市場に登場してから、モトラム社の半導体売上が急速に低下している。シオリはモトラム社のRAMは不良品が多くユーザーとの間で絶え開かない争いが起こっている、と書いてあった電子工業関係の専門誌のことを思い出した。

倒産の原因はこのデータを検討する限りでは掴めない。確かに日本企業の激しい市場攻勢も原因の一つには違いないが、それだけでなく、たとえば4メガビットRAMを市場に出すことに遅れをとったこと、過剰な設備投資が経営を圧迫したことなど、原因は複合しているように思える。

それに軍需に依存し過ぎたことからくる民需用の通信機の研究開発に遅れ、同業他社との提携関係もたとえばINBやATCなどに比べても問題にならないほどのたち遅れをみせている。こうしてみると、倒産にいたった原因は色々と考えられる。

やはりモトラム社首脳の経営環境に対する定見のなさが最大の原因のように見える。しかし問題は、倒産に追いこまれた原因をスコット社長は日本企業のダンピング行為にある、と断定していることだ。モトラム社の倒産問題は日米関係にかつてない波紋を投げかけてきた。

シオリは考えるのを止めた。出発の時開か追っている。時計を見ると、午前十



時を回ったところだ。成田まで車を飛ばしても、一時間四十分程度はかかるだろう。のんびりはしてられない。そろそろ出発の準備をしなければならぬ時間になっている。シオリはベッドのなかで、思いつきり伸びをした。

ベッドからはいあがると、バスルームにたった。熱いシャワーが心地よく、肌を刺激した。もう一年あまりも男と肌を重ねたことのない軀を愛しむように抱いた。鏡に顔を映してみた。ひどく疲れた顔をしている。目の縁に黒いくまができていた。ぞつとするような、厭な気分になった。シオリは全身を鏡に映し出してみた。艶のある肌に水滴が美しく光っている。それを見て、シオリは少し安堵した。肌は艶々と輝き、豊かな胸にピンクにいろづいた乳房がうずいている。シオリはそつと、摘んでみた。しびれるような感覚が足の爪先に伝わっていった。

「でも、もう若くはない」

シオリは呟いた。ふつと、チェンバレンのことが脳裏に浮かんできた。四分の一が日本人だというのが、チェンバレンの口癖だった。初めて会ったときにも、チェンバレンはいたずらっぽく笑い浮かべながらそんなことをいった。心の奥を射抜くような大胆な視線に、シオリは戸惑いを覚えた。黒い瞳、黒い髪。チェンバレンはとても魅力的で、行動的な男だった。明日の今ごろはニューヨークである。チェンバレンに会えるだろうか。アメリカは、明日は日曜だ。彼は家族サービスで忙しいかも知れない。チェンバレンのことを考えると、シオリの胸の内が次第に熱くなってきた。

チェンバレンはマンハッタンの一等地に事務所を構える若い有能な弁護士だった。日本問題のロピイストとして、どんな仕事でも無理を承知で引き受けてくれた。彼とはシオリがニューヨークに産業調査員として赴任して以来、仕事を通じての付き合いだ。だから知り合って二年あまりになっている。産業調査員としては、最も信頼のおけるロピイストの一人だった。今度の問題ではまずチェンバレンに相談してみようか、彼だったらどんな対応策を考えるか。そんなことを考え、妄想を打ち消すようにバスルームを出た。

シオリは、長い髪をブラッシングしながら窓の下の風景に見とれた。初冬の日差しが淡く、ホテルの中庭を照らし出していた。水鳥の番が人工の池で遊んでいる。それがシオリにはたまらなく羨ましく思えてくる。

あのあと、彼女たちはどうしたのか。夫を亡くした美沙子のことも気になった。

せつかくの集まりだったのに、途中で中座しなければならなかったことが、とても残念に思えてくる。

味気ないホテルのレストランで一人で昼食をとるのもなんとなく気が進まない。東洋経済研究所に勤めている理恵と話してみたいと思った。シオリは受話器を取り上げた。無機質な音をたてベルが鳴り続けた。人が出る気配はない。シオリは諦めて、受話器を置いた。食事のことはどうでもよくなっていた。

化粧台の前に座り、鏡に映し出された顔にファンデーションを塗り、墨で眉を整え、薄緑のアイシャドウでラインを入れる。化粧で表情が変わっていく。いつもの強い女に変身していく自分の顔を見ながら、シオリは思わずふき出してしまふ。笑いの目尻に涙が浮かんでいる。シオリはスーツケースを持って立ち上がった。もう一度、姿見に全身を映し出してみた。どこから見ても、気丈で理的で、立派なキャリア官僚に変身を遂げていた。

午後の東京国際空港は考えていたほどの混雑ではなかった。少しばかり贅沢だとは思ったが、出張旅費に自費を継ぎ足して、ファスト・クラスのシートを予約しておいたのがよかった。同年輩と思われるスチュワーデスが愛想よく座席に案内してくれた。

食事は断わることにした。ワインを呑んだあと、睡眠薬を含みぐつすりとすることを、ひたすら考えた。

機体が大きく揺らぎ、金属音を響かせながらボーイング747は地上に浮かび上がった。幾度か旋回を続けるうちに、伊豆大島に沈む太陽の影が眩しく機内にさしこんできた。

(つづく)